

---

# 壁伝いISOS

都宮 京奈

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

壁伝いSOS

### 【Nコード】

N8968Z

### 【作者名】

都宮 京奈

### 【あらすじ】

犯した覚えのない父殺しの罪で実刑判決を受けた久手は、医療刑務所に移送される前日、ある少女と面会する。久手は少女から「布団に入り夢を見る」と助言され、『はじめに』というタイトルの文章を書き残し眠りに着く。そして醒めることのない眠りの中で長い夢を見る。

夢では二人の少年がそれぞれを助け出すために奮闘していた。遠藤圭という少年の過去を思い出す姿。御名風ハルという少女が遠藤圭を助け出す姿。二人は互いを救い出すことができるのか。

## はじめに

はじめに

この物語は非常に複雑に入り組んでいる、荒唐無稽な小説群です。筋を説明すると、高校生である主人公が自分の作り出した少女に心を救われる、という至極簡単な一本道ではあるのですが、何ぶん主人公が少女に救われる過程というものが前代未聞なのです。

これを北海道の南にある刑務所の獄中で書いている私自身、どうして選択肢を間違ってしまったのかという疑問で頭を痛めてしまうのですが、こうなった以上は仕方がない。読者に裁量をお任せしようと思ひ、こうして不本意ながらもお詫びを告げる章を設けた次第です。

さて、この話を読み進める前にひとつだけ、書かなければならぬことがあります。

それは、何が虚構で何が現実なのか、作者である私自身理解できていないということです。

きつとこの文章を読み進められている読者様たちは、小説で起きる数々の出来事を嘘か真か各々に備わっている慧眼で審議するであろうと思ひます。ですが、それは止めたほうがいいと進言しておきます。

なぜなら私には過去が無く、その無い過去を思い出すためにこうして文章を綴っているからです。つまり、まったくの嘘かもしれないということなのです。

もちろん中には私自身が経験した真実も含まれていますが、その経験も嘘かもしれない、誰かに創られた世界かもしれない可能性があるのです。

私は犯してもいない父親殺しの罪を償うため、存在しているのか定かではない自分の半生を振り返るべく「犯罪はこのように起きて

しまったのではないか」と仮説を立てて獄中にて小説を執筆しています。

実を言いますと、こうして書いている私自身、誰かに書かれることよって創られた人物なのではないかという疑いの念を晴らせぬまま、手の動くままに文章を書いています。

私はどこの誰で、どうして謂れない罪を着せられてしまったのか、まったく合点が行かぬまま、それでも警察の方に突きつけられた父親殺しの罪を認めようと尽力しております。

もしかしたら私は空白の存在なのではないかとも考えました。

ということは、誰かに経歴や人生観を書かれなかったのではないかと思っております。ですから、できれば誰か、読んだ誰かしらの手で私の経歴を、この紙の隅にでも書き付けてくださることを祈っております。

そのような諸々の理由から、読者様たちは出来るだけ頭を空にして、文章を読み進めていただくことをお願い申し上げます。

また、恥ずかしながら、下に明記する署名は私が以前から使用していた筆名です。

この物語が私の過去となるよう祈りを込めて。

久手くで  
贄緒にえお

## 誰かが書いた短編 倉庫娘

あなたは八歳の娘を亡くしました。

交通事故でした。

大事な一人娘を、与り知らぬところで亡くしてしまったのです。

ちょうどそのとき妻と折り合いが悪かったので、事故をきっかけにして別れます。

独り身は寂しいものでした。家庭の癒しの場として購入した庭付き一戸建ても……一人で暮らすにはとても広く感じられて、手放すことに決めました。

引越し先は、庭付き一戸建てとは違ってとても狭いですから、持ち込める荷物も限られてきます。別れた妻は自分の荷物だけを持っていったので、荷物はあなたのものと、娘のものだけでした。

あなたは悩みます。生前、娘が着ていた服や遊んでいた玩具の数々を捨てようか どうしようかと。

アルバムぐらいなら思い出として取っておくことができますし、何よりも場所をとりませんから持って行くことができます。ですが、服や玩具となると話が違ってくる。娘に買い与えた服と玩具はかなりの量で場所をとってしまいます。

……とはいっても娘が触って着て遊んだ実物です。

あなたは捨てられません。荷造り用の箱に大事に仕舞っておくのです。

引越し先は、一人で暮らすには丁度いい狭さでした。六畳一間しかなくとも生活する分には困りません。なにより、もう娘はこの部屋にはいないのですから、娘と遊ぶ部屋も本を読んであげるだけの大きい布団もあなたには必要ありません。

……あなたは荷物を箱から取り出して、整理を始めます。家具や家電、そして衣類を四方に置く。最後に娘の服と玩具を床一面に広げ、分厚いアルバムを敷き布団に広げます。

布団に腰を下ろし、分厚いアルバムを最初の頁から順々に捲っていきます。

娘の可愛い写真一枚一枚をじっくり見ては、頭の中で思いだし思いだし目を細めます。

アルバムの最後の頁を捲ると、真っ白な頁にたどり着きます。娘との思い出旅行もこれでお終いです。途中で列車から降ろされたあなたは、足を動かすことはできません。次の列車には乗れないのです。

さて、あなたは空腹を感じました。

財布を手に取り、近場の飲食店へ向かうことにします。

着いた飲食店は賑わっていて、繁盛している様子です。慌しく右往左往している店員を横目で見て、席を探すことにします。

店内を見回すと、ぽっかり空いている四人掛けの席を見つけました。あなたは空いた席に向かいます。

あなたが座ろうとしている席の後部席には、二人の男が向かい合わせて座っていました。男たちは楽しそうに談笑しています。一人は大柄な男で、その体躯に似合わない高い声でひきつった笑いを漏らしています。もう一人のほうは、長い髪をだらしく垂らしている細身の男で、大柄な男の話聞きながら氷をがりがり噛み砕いています。見るからに、嫌な感じ。

席に座り定食を頼むと、やることもないので宙に視線を彷徨わせました。楽しそうな話し声と、明るい曲調のBGMの雑音が周りにあふれていました。

ふと、あなたは思いつきます。そして紙ナプキンを取り出しました。

長方形の紙ナプキンを丁寧に正方形にちぎり、鶴を折り始めます。一回一回慎重に紙ナプキンを折り折りして、できあがった鶴をちよこんとテーブルの上に座らせます。とても小さい鶴はじつとテー

ブルの上に倒れないように座っています。

机の上の鶴が寂しくないように、もう一つ鶴を折ろうと紙ナプキンに手を伸ばしたときでした。

「それで、倉庫娘は元気か？」と大柄の男が言いました。

あなたは、後から聞こえてきた言葉に含まれている単語の、聞きなれない響きに戸惑います。

「倉庫娘」とはなんだろう。

紙ナプキンを正方形に切り取りながら、あなたは『倉庫娘』とは何かを考えます。

「こんなところで……え？ まあいいです。元気といっても客層が客層ですから。ほら、品質管理が大事でしょう？ ニーズに答えるのは想像以上に骨が折れますね」長髪の男が答えます。

折り紙を慎重に折り折り……。

「なるほど。でも信じられないよな。わざわざそんなものに高い金払うなんて。俺には価値のあるものには見えないけど。処理も大変だろう？」

「今日も会いに行くのですか」

「……お前もくるかい？」

あなたは「処理」という嫌な単語が耳について離れません。

二つめの鶴を折り終わり、一つ目の鶴の横に並べました。ちょうどウエイトレスの声がして、定食がテーブルに置かれます。

「本当にこの定食でよろしいですか？」

……すでに『倉庫娘』は、あなたの中で逃れられない呪いの言葉のようになっています。どんなものなのか知りたい。何をしているのか知りたい……ぐるぐると頭の中をその言葉が走り回って止まりません。

どんな可愛い顔をしているのか……あなたの中の『倉庫娘』は、亡くした娘の顔になり、無邪気に笑いかけます。

後の席に座っていた大柄な男たちは立ち上がり、お会計をするためにレジの方へ歩き出します。

「本当にこの定食でよろしいですか？」

二人組みの後を追うのです。早く、ほら急いで。

気づけば外は暗くなっていました。鴉の鳴き声がかかります。

二人が着いたのは、港のはずれにある倉庫群でした。

いくつもの倉庫の間を抜けて歩き続ける二人に見つかからないように、倉庫の壁に隠れながら後を追います。

辺りはとても静かでした。男たちは一番奥の小振りな倉庫の前に立ち止まると、周りを何度も見渡して、扉の近くの装置をいじめます。あなたはまじまじと小振りな倉庫を見つめました。

倉庫は灰色に塗り固められています。目を凝らしてみると、ところどころ塗料が剥がれ、それでも無口に聳え立ち、体の中の荷物をしっかりと見守っているように感じました。

きつとあの中に「倉庫娘」は居るんだ。胸が高鳴るのを抑えようと、口に溜まっているどろどろの唾を飲み下します。

痛々しい声を上げながら扉が上がりきると、二人の男は倉庫の中へ、まるで吸い込まれるようにするりと入りました。あなたは胸の鼓動をいくつか数えてから、扉に近づき、そつと中を覗き込みます。まず最初に二人の男の背中が見えました。大柄な男は大きめのごみ袋を持っています。長髪の男は青いビニールシートを豊んでいました。そして二人は何かを見下ろすようにしゃがみこんで話し合います。

倉庫の中はとても簡素な作りで、壁の左右に大きさのバラバラな角材が積み重ねられているだけです。どうやら「倉庫娘」は二人の背中で隠れているのだろう、そう考えて二人の背中の奥に目を向けます。

……ですが、上手い具合に隠れてしまっていて、二人が見下ろしているモノが何かわかりません。

もちろん、あなたは二人が見下ろしているモノは「倉庫娘」です。そして、どうしても娘をあなたは見たいのです。ですから、二人に

気づかれないように慎重に体内へと踏み込むのも当然ですし、壁に置いてあった丁度いい角材を手にして、きつく握り、それを二人の頭頂部に振り下ろすのも当然ですよ。

あなたはやっと、「倉庫娘」と対面を果たすことができました。

気がつくと、あなたは娘と一緒に布団の中で眠っていました。

腕の中で眠っている娘に口付けをすると、あなたはいそいそと押入れに向かいます。

お目当てのカメラを手にして、眠っている娘の布団の中に滑り込みシャッターを切ります。上手く取れているか心配なあなたは、立て続けに二回目、三回目とシャッターを切り続けます。

これでアルバムを完成させることができます。嬉しくなったあなたは、娘を起こすことにします。

さあ、朝だぞ。起きなさい。

娘は寝ぼけ眼を擦りながら上半身を起こします。

「ばば。もう朝？ 眠たいよう」

寝坊すけさんだな。今日は二人で出かけよう。動物園がいい？ それとも遊園地？

「わあい！ どっちも行く！」

両手を上げて喜ぶ娘を見て、あなたは娘が何も身に付けていないことに気づきます。

床に散乱している服を手繰り寄せ、娘に着せることにします。

「ねえ。ママは一緒にいかないの？ ままも一緒じゃなきゃイヤだよ」

あなたは困ってしまいます。妻とは離婚してしまったのです。どう言おうか思案しながら、娘の着付けを終えると、

我がまま言わないの。そんなこと言ったらどこへも連れて行かないぞ。

誤魔化すことにしました。

「ぶつ……ゆうえんちは別にいい。もつと寝るう」  
あなたはため息をついて、布団に潜り込んだ娘に人形の玩具をちらつと見せます。

人形遊びでもしよう。だから機嫌を直してくれよ。  
娘の顔がふにやつと緩みました。あなたは出かけるのを止めて一日中人形遊びに付き合ってあげることに決めたのです。

次の日、目を覚ましたあなたは、娘が虫に集<sup>たか</sup>られているのを目にします。

急いで小虫を手で払うと娘に呼びかけます。

大丈夫か？ どうしたんだ。顔色が悪いぞ。

娘の顔は歪み、昨日着せた服の中からのぞく体には無数の紫色の斑点が広がっています。

「へへへ。大丈夫だよぱぱ。ちょっと体が痛いだけだよ」  
力なく笑う娘を見て、目じりが熱くなるのを感じました。急いで顔を手で隠すと、あなたはなんとも言えない嫌な匂いにするのに気づきます。まるで何かが腐っているような、すっぱい匂いが鼻腔を痛めつけるのです。

どうやら娘のほうから、その匂いは漂っているようでした。  
それでも構わずあなたは抱き寄せます。

痛いんだね。ぱぱがついてるよ。ぱぱがいるから。  
抱き寄せた娘の体はぶよぶよよしていて、今にもぼろりと腕が取れそうでした。その娘の体を優しく丁寧に、それでもきつく抱きしめると、あなたは唇を強く噛みます。

何が欲しい？ 何がしたかった？ ハル……どうして……。  
言葉が詰まって出てきません。交通事故で亡くした娘が、また遠い所へ行ってしまう。

娘は虚ろな目をどこかに向けて、ポツリと言います。  
「ふたつ……ぱぱにお願いがあるの。聞いてくれる？」

あなたはもちろん頷きます。何度も、何度も。

うん。お前のためなら何だってしてあげられる。言っ  
てごら  
ん。

娘は、一瞬痛さも忘れたようなあどけない表情で笑います。

「一つはね、ままとぱぱと一緒に居るところが見たい。二つ目は…  
…弟か、妹が欲しいな。お姉ちゃんになりたいの。そしたら、なん  
でも我慢できちゃう」

娘はそう言い終わると、目を閉じ、意識を腕に預けました。一斉  
に蛆虫達が娘の全身を覆い尽くします。異臭はさらに増して、部屋  
の明かりは急に薄暗くなります。布団は黒っぽい何かで汚れ、あな  
たの服は何かの液体でぬるぬるです。

腕の中で笑っていたはずの娘の顔を覗くと、眼球が収まるはずの  
場所は寂しく空いており、そこには何十、いや何百もの虫たちが蠢  
いていました。

……あなたは、その後どうするでしょうか。「倉庫娘」をもう一  
度求めるでしょうか？

あなたは、

## 玩具箱から世界を想像する男

じつじつと吹きすさぶ雪と風のせいで、窓ががたがた音を立てている。窓の外は真つ暗で雪の白色はくしやくが闇夜にアクセントをつけるようにちらついている。壁掛時計は深夜一時を指していた。

ここは函館にある少年刑務所の独房である。

四畳半の独房は立て付けが悪く、壁も薄い。部屋の中なのに吐く息は白く、暖房が満足いくほど利いていないので手足の先は感覚のないほど凍えきっている。がたがたという音がなっても仕方がないほど、古いものばかりだった。

独房に備えられているのは、剥き出しのトイレとブラウン管のテレビ、畳の上に積まれている一式の敷布団。そして机と筆記用具。

この独房に收容されている男は、久手といった。年は十七、グレイの上下服は受刑者として普通ではあるが、頭にぐるぐるに巻かれている包帯は見るものに奇怪な印象を与える。

包帯を巻いている理由は、この久手という男が收容される間際、頭から硫酸を被ったからであった。顔面の皮膚がケロイド状に溶けてしまい、見るものを不快にさせるため包帯で顔を覆い隠していたのだが、そのせいで表情が読み取れず、刑務所の看守は久手を持て余していた。

久手は、窓の外の世界を視認すると、今まで机に向かい貪るように書き続けていた原稿用紙へと視線を落とす。雪がちらついていると独りごちて鼻歌を歌う。

久手は父親殺しの罪で実刑判決を受けここに收容された。だが、精神に問題があると診断され、本州にある医療刑務所に收容される運びとなった。その本州への移送はこの次の日、一月十二日のことである。

この日 一月十一日 の面会時間に、久手の元を訪れた人がいた。

久手はその人との面会が大層楽しかったのか、楽しそうに鼻歌を歌い続ける。そして、急にハミングを止めると、原稿用紙を検分し始めた。

久手は原稿を検分しながら、着物を着た西洋人形のような顔を持つ少女を頭に思い描く。

そう、面会者である伊井筋いいすじ 桐真きりまという少女との会話を思い出していた。

面会室に、包帯男と着物を着た銀髪の少女が向かい合せになつて座っている。当然プラスチック板で二人の間は隔てられている。

少女の手には紐で綴じられた原稿用紙の束があった。

「あなたの書く小説は、なかなか興味深かったです」

人形のように整った顔を久手に向けて、面会者は笑いかける。

「それはよかったです」

久手も伊井筋に笑いかけた。包帯で顔面が覆われているため、笑い声で応答した、というべきか。久手の斜め後ろに立っている看守は、包帯男の機嫌がいいことを悟ると、安堵の表情を浮かべた。

「あなたの書いたこの『倉庫娘』という小説、最後の文章が完成されていませんけど、どうしたんでしょう。『あなたは、』の後にちゃんと書くつもりだったんですか？」

伊井筋は銀色の長い髪をかきあげて、久手に問いかけた。

「最後の文章は決まっているんです。ただ、書きたくないというか……完成させるのをためらっているんです。それよりも、あなたは……」

「伊井筋桐真と申します。桐真と呼んでください」

「桐真さん、あなたはどうして僕と話がしたいと思っただんでしょう」  
久手はかさついた皮膚が痒いのか、包帯の上から力強く頬を掻いた。

「僕はあなたを知らない」

銀髪の少女は事も無げに答える。

「ですが、私はあなたを知っている」

「フェアじゃないですね」

「ええ。あなたがここに居ることと同じです。でしょう？」

久手は口の両端を持ち上げてくつくつと笑う。そのおぼつかない笑いは、見るものをぞつとさせるものだった。

「僕はなぜだろう、殺した覚えもない父と、居た覚えのない姉のせいでここにいる。言われてみればそうですね。まったくフェアじゃない」

「記憶を失っているんですか？」

包帯から覗く両の瞳を濁らせて、久手は言葉を繰り返す。

「僕は記憶を失っているんですかね」

「あなたは何処の誰で、何者なんでしょう」

「何者なんでしょうかね」

久手の後ろに立っている大柄の看守は言う。

「こいつ、いつもこんな調子なんですよ。何を聞いても答えやしない。質問するだけ無駄ですよ」

伊井筋の後ろに立っている小柄な看守は、その発言をいなす。

「黙ってる」

大柄のほうの看守は、そう言われてはつの悪そうに舌打ちをした。そのやり取りを見て、楽しそうに久手は笑う。

「いいんです。僕が悪いんですよ。僕は過去をもたない。ないものはしゃべれない。捏造するしかないんです。誰か、いませんか？

僕の過去を捏造できる人は」

そういつて人をなじり小馬鹿にする態度は、大柄な看守の機嫌を損ねたみたいだ。

「人を殺しておいて……この」

伊井筋は、その言葉を遮るようにして久手と看守の間に割って入る。

「まあまあ。落ち着いてください」

少女は、大きくため息を吐くと久手を見つめ、言葉を吐き出した。  
「私は全て知っています。あなたが久手じゃないということも知っていますし、過去を持たないということも理解できています。だって、あなたはこの世界に居ていい存在じゃない、本当は遠藤圭という人物の偽物なんですから」

それを聞いた久手は、体を固め、伊井筋を注視した。伊井筋は、紅に染まった下唇を人差し指で弾く。

「気づきませんでしたか？ あなたは遠藤圭の形なりそこないです。人は誰しも自分の分身をもっています。この意味、分かりますね」

久手はいきなり立ち上がり、震え出す。それを見た大柄な看守は、久手の両肩を掴んで椅子に無理やり押さえつける。

伊井筋は、不様に押さえつけられる久手を見ながら、手元に置いてある原稿用紙を彼に開いて見せた。

「見てください。『倉庫娘』という小説、あなたは確かに書きましたよね」

久手は開かれた原稿容姿のマスを目でなぞる。

「一文字も書かれちゃいません。白紙です。『倉庫娘』を書いたのはあなたじゃないです。遠藤圭が書いたものなんです」

少女が言ったとおり、原稿用紙は空白のマスが並べられている、まったくの白紙だった。

「じゃあ僕は……」

「誰でもない存在です。人間の形そこない。架空の罪を犯した架空の存在です。世の中には、そういう架空の領域というものがあるんです。そこから救うことができるのは、私だけです」

少女は立ち上がると、後ろに立っていた看守に目で合図を送る。

看守は頷いて、廊下に繋がる扉を開いた。

「ま、待ってくれ！！ 僕は、一体……」

少女は言葉をそつと置くように残した。

「心配はいりません。布団に入り、夢を見るのです。そうすれば救われます。いいですか、あなたは眠りにつくのです。そうすれば一

度と目覚めることはありません」

久手は伊井筋に縋るようにして質問する。

「どんな夢を見るのですか？」

その問いに少女は答えず、そのまま扉から姿を消す。

面会室に残されたのは大柄な男と久手だけだった。

久手は、はじめに、という文章を書き終えて、布団を敷いた。

掛け布団を捲り、体を布団と布団の間に差し込ませる。

どんな夢を見るのだろうか、と久手は想像を張り巡らせる。それはとても心地のいい妄想であった。とても魅力的で気が違ってしまうほどに。

まさか自分がなあ、と一人言を呟き目を瞑る。

「ごうごうと吹きすさぶ雪と風のせいで、窓ががたがた音を立てている。窓の外は真っ暗で雪の白色はくしやくが闇夜にアクセントをつけるようにちらついている。壁掛時計は朝三時を指していた。

独房に備えられているのは、剥き出しのトイレとブラウン管のテレビ、畳の上に敷かれている一式の敷布団。そして机と筆記用具。

もはや独房に敷かれた一式の布団の中には、誰も居なかった。

## 壁伝いSOS1 こんこんと鳴る壁

曇り空と同化する建物。

僕が病棟を見上げたときに思った第一印象はそれだった。灰色で塗り固められた病棟を見上げて僕は白い息を吐く。

12月だというのに、生暖かい風が頬を撫でるように吹き抜けていく。

目の前に聳え建っているのは、精神病棟だった。聞くのも嫌な、セイシンビヨウの人が入院する病院だ。

これから病棟にいるであろう姉を訪ねに、この不気味な四角い箱の中に侵入しなければならぬ。ただ、姉の安否を確認するだけなのだけど、僕にとっては心苦しく、同時に怒りを覚える行為であった。

頭を振ってそんな怒りを頭の片隅に追いやり、足を前へ踏み出す。大丈夫、姉が好きな折り鶴もちゃんと千羽ぶん折って、肩掛け鞆に入れてある。僕はそれを手渡して、微笑みかけてやればいい。なんて言えればいいのだろうか？

かける言葉は用意していなかった。だって、自分が傷つけられた分けじゃないし、あくまでも姉の気持ちは姉にしか分からないのだから。下手な言葉では、もしかしたら姉を傷付けてしまつかもしれない。あれこれと言葉をかけないように気をつけなくてはならない。僕は、病棟の入口に近づくにつれ、だんだんと不安感を募らせてゆく。

どういつて励ませばいいのだろうか。千羽鶴は姉の心を癒してくれるのだろうか。

入口の前に着いて思考を巡らせていると、鼻先にぴつという冷たさを感じた。

僕は顔を曇天の空に向ける。

雪だ。雪が降ってきた。

今年は雪が振るのがだいぶ遅れている。天気予報のキャスターは楽しそうにそう告げていたのを思い出した。

僕は視線を入口のガラス扉に向けて、唇を噛む。

受け止めることの出来ない事實は、忘れてしまえばいい。

そのために家族という絆があるんだ。

父や母でなくても、この弟である僕が。

姉を守るのは他の誰でもない僕だ。

僕は決意をして、精神病等の入口のガラス扉を開けた。

僕は中学を卒業して、受験を越えて高校生になった。そこまでラックの高い高校ではなかったけれど、親友である御名風みなかぜハルと一緒に高校に行くことが出来て若干嬉しかった。そのことを、まだ姉に伝えていなかった。父や母が僕の受験に迷惑がかかると、姉の居場所を受験を理由に教えてくれなかったから、姉が入院してから顔を合わすのは初めてのことなのだ。

両親は僕から姉を引きはがした。何度もそのことに不平不満を言った。けれども、両親は聞いてくれなかった。仕方がないことだと一辺倒の答えばかり。けれど、僕は諦めなかった。

高校の成績が上位十番以内であれば姉の居場所を教えろと発破をかけ、どうにかして姉の現状を知るよう努力したのだった。

見事入学早々の期末試験で十番以内を確保して姉の場所を教えてください。今に至るのだけど、少しだけ釈然としなかった部分があった。

どうして、両親は僕に家族である姉の現状を教えてくれなかったのだろうか？

普通なら、僕は姉の一人だけの弟なんだからと、教えるのが普通なんじゃないのか？

いろいろな疑問があったが、そんな疑問は浮かべるだけ無駄だと思っただけ生きてきた。

僕の世界では、現実にはシステムティックで合理的な世界なのだ。

人それぞれの能力のメーターに出来ることと出来ないことが割り振ってあって、能力値の高い 大に出た人が見える世界と、能力値の低い僕が見ている世界は完璧に違う。字の通り壁に隔てられた世界に生きているのだ。

そんな思いをずっと抱いて生きてきた。大に入学出来るような偏差値がないと、生きる価値がない。そう、本気で思っていたのだ。それを根底から否定する存在がいた。それは姉だった。

姉はいつも優しい声で、可愛い顔を隠すように切り揃えられている前髪を揺らして、言うのだ。

「元気だして、ほら私がいるから。けーちゃんはどんなつても私の一人だけの弟だよ？」

僕は受験の期間、幾度となく姉の優しい声に癒された。そうでなくとも、僕が子供だった時分から何度となく迷惑をかけたのだ。恩返しするとしたら、心の安定を崩してしまった今しかないだろう？

僕は、入口の受付の女性に姉の居場所を聞き、足早にそこに向かう。

どうやら姉は三階の右廊下の突き当たりの左側にある部屋にいます。みたいだ。

僕は走って姉の病室の扉を開けた。

病室は姉のベッドだけが置いてあった。それを見て、初めて個室だったことを知った。

目の前のベッドに横たわっている少女は、紛れも無く姉だった。

姉は、ふがふがと掛け布団を動かしている。

「三春姉ちゃん？」

姉は僕の姿を見て、もう一度動こうとするが、そこまで動くだけの力がないのか、ぼこぼここと掛け布団を蹴っては、「ふー」と言うだけで、やがてゆっくりと動きが停止してしまった。

僕は駆け出し、姉の顔を見る。

姉の表情は青ざめて、力なく項垂れている。長い睫毛も同様に濡

れ伏せていた。

「大丈夫！？ 具合悪そうだよ」

何度か声を掛けるが、返事がない。僕は慌ててナースコールをかけるためのボタンを、ベッドの頭部分から探りだし、見つけて押す。そのとき、姉の頭頂部分 右の壁のほう からこんこんと音が鳴り、それからすこし経って壁越しから幼子の聞こえてきた。

お姉ちゃんを助けたい？

僕はその子供の声を聞いて一瞬耳を疑ったが、姉の顔色の悪さをなんとかするのが先決だと、枕元に放り投げられているボタンを手にとって、ナースコールをかけ続ける。

それでも声は止まない。

助ける方法があるよ。

何度押しても応答のないボタンを投げ出し、両手で耳を塞ぐ。

それでも声は止まらない。

すべて知っているんでしょ？

「誰だ？ どうして姉を苦しめるんだ。どうして僕を苦しめるんだ」  
今度は目を瞑る。けれど、瞼の裏に姉の苦しむ顔が浮かび上がる。

いい？ これから言うことを順番を守ってするんだよ？

この声は誰だ？

もう一度声がした。

いい？

1

僕は目を覚ました。

はっと意識を揺り起こす。どうやら随分長い間ぼーっとしていたみたいだ。

一旦背伸びをして欠伸をこなすと、もう一度ばかり学習机の上に据え置きされているパソコンのモニターを凝視する。

モニターは、ちりちりと点滅しながら、メモ帳を表示している。メモ帳には、たくさんの文字が敷き詰められていた。

さっきまで書いていた創作小説の文章を流し読みして、一通り確認をする。それが終わるとフォルダに保存して、パソコンの電源を落とした。

ぐるりと回転椅子を回して部屋を見渡してみる。視界の左側にあるカーテンの隙間に目を向けると、どうやら窓の外は雪景色みたいだ。雪が地面に向かって降りつけている。

目元がしばしばするのを感じたので、目元を手で揉んで首を鳴らす。小気味良い音が部屋に鳴り響いた。

かなり長い時間椅子に座っていたみたいだ。……それなのに、小説のほうは数行しか進まなかった。

構成はすでに出来上がっているのに、なかなか良い文章が思いつかない。スランプなんて経験したことないのだけれど、これがそうなんだろう。

（気分転換に、首を360度回してみようか）

僕は、そんなことできつこないのに、いちおう無理くり首を捻ってみる。結局、首と共に肩も動いてしまって、ちっとも面白くはなかった。

回転しないものは回転しないのだ。そういう風に作られてないんだから。

くだらないことをしたと一人ごちて、椅子から立ち上がる。そして何事も無かったかのように一階の居間へ下りようと、玄関に通じるドアに向かって歩き出す。

……ふいに、灰色の壁のほうが気になって、足を止めてしまう。

三春姉ちゃんみはるの部屋と弟である僕の部屋を仕切っている灰色の壁は、強固に聳え立っているように見えた。三春姉ちゃんを必死で守るように、がっちり。

（三春姉ちゃんの痛みの程度を数値で表示することはできないだろうか）

僕はそんな馬鹿馬鹿しいことを真剣に考えてみた。180？ それとも200？ それとも……そもそも100がどれぐらいの痛みなのだろう。

唐突に視界を襲う眩暈。目元がしばしばしてくる。

もう一度、手で揉むために目元へ指先を向かわせると、湿った液体が目尻から流れているのを知った。

少し疲れたみたいだ。僕は、居間に降りるのを気持ちぶん……疲れが取れるまで遅らせることにして、部屋でもう少しグズることにした。

灰色の壁に隣接しているベッドに向かって歩き出すと、突然壁越しから乾いた音がする。

こんこん。

僕は返事してあげるべきか迷った。返事をすれば三春姉ちゃんが傷つかないのか分かっていた。けれど、それをすることに気乗りしなかった。

少し間を置いて、また壁から壁を叩く音がする。

こんこん。

ベッドに飛び込み枕で頭を覆い隠す。

音は、もう一度だけ鳴って、鳴りを潜めた。

こんこん……こん。

2

ちょうど一週間前のことだ。

いつものような家族四人の夕食が終わると、突然に父さんが僕に向かって「話がある」と言い出した。

僕は僅かばかり体を強ばらせて、思い当たることを懸命に頭の中から探し出そうとした。

そんな僕の隣で食器を片付けていた三春姉ちゃんは、一瞬手を止めて僕のことを覗くようにして見ると、顔を曇らせた。けれどそれ

は一瞬のことで、三春姉ちゃんはそそくさと僕の分の食器まで重ねて台所に持って行き、居間のドアを開けて子供部屋のある二階へ消えていった。

向かい側に座っている母さんは母さんで、わざとらしく咳払いをすると、いそいそと親父の食器と自分の食器を重ねて立ち上がり、台所のほうへ消えていく。

「……ねえ何のこと？　もしかして勉強のこと？　それなら三春姉ちゃんにから教えてもらっているから心配いらないよ」

僕の言葉になんら影響されず、父さんは母さんにお茶の催促をする。

多少ぎこちなく返事をする母さんに一瞥されると、一方的に話し始めた。

「実はな、お前に隠していることがあるんだ」

親父は僕を睨みつけながら、重そうに唇を開けて僕に向かって言った。

「大分昔にな、三春は、ある事件に巻き込まれて、心と体に大きな傷を負った」

「……何の冗談？」

「冗談をいうような父ではないことは長い付き合いで重々承知している。だけれども、あまりの唐突さに目を丸くしてしまった。いや、恐ろしくなったといったほうがいいかもしれない。」

母さんは二人分のお茶をテーブルの上に置いて、居間と外を分けるドアをちらちらと落ち着きなく見ている。三春姉ちゃんは部屋に行っただけ戻ってこない。

「……それ、僕だけ知らないこと？　家族の中で僕だけ？」

家族が僕にずっと隠していた……それが僕には恐ろしく感じたのだ。

父さんはじつと僕の目の奥を見据えて、喉仏を動かした。テーブルの上のお茶をひっ掴むと一気に飲み下して、三春姉ちゃんが巻き込まれたらしい事件の顛末を詳しく語り始めた。

「三春が二十歳の時……つまり今から一年前だな。ある冬の日、変質者に誘拐された。どうやら帰宅途中、一人でいたときに連れ去られたらしい」

やけに淡々と語っているのはわざとだろうか。父さんは目線を動かさず、まるで何かに縛られている猛獣に見える。

「……その二日後、三春が発見された。当時住んでいた 県の霊園で……裸のまま……茂みの中で放置されていた。気を失っているだけで一命は取り留めたものの……」

父さんの目は血走っている。母は首を出来損ないの玩具みたいに振り回して、ドアをちらちらと落ち着きなく見ている。

「三春は誘拐犯に性的暴行を受けたらしく、心を病んで、病室の窓から……」

僕は、眩暈を覚える。視界がブレて、今ここがどこなのか分からなかった。

「え。ちよつと待つて。三春姉ちゃんなら生きてるじゃない。死んでないでしょう。聞いたこともない」

もちろん僕の声は父さんには届かない。

「それから、そこには居づらくなって、ここに越してきた。本当は伏せたまま暮らしたかったんだ。だがな、三春がどうしてもお前にだけは秘密を打ち明けたっていうもんだから……」

そのとき、居間のドアが開かれて、三春姉ちゃんがおずおずと入ってきた。

「ごめんね、けーちゃん。けーちゃんだけには隠したくなくって。シヨックだったでしょう？」

三春姉ちゃんは困惑していた。当たり前だ。僕のほうが困惑している。だけど、その当たり前であろう反応が僕には恐ろしく感じられた。

「いや、ちよつと。ちよつと待つて……」

僕の声はやっぱり届くはずがなかった。父さんは、顔を顰めて胸ポケットからキャンビンマイルドの箱を取り出し、一本引き抜き、ラ

イターで煙草の先っぽに火をつける。

大きく煙を吸い込んで、どこか遠くを見たあと、おもむろに立ち上がり三春姉ちゃんの肩に手を乗せた。

「あとは……二人で話し合いなさい。きつと、圭も聞きたいことがある。いろいろあるだろうから」

三春姉ちゃんは、少し目を潤ませて、僕をきつく抱きしめた。

「……けーちゃん。けーちゃん。けーちゃん」

泣き始める三春姉ちゃんを……僕はなんとか抱きしめることができた。

### 3

僕は根気負けして、いつものように返事することにする。

こんこん。

このやり取りは、三春姉ちゃんが取り付けたものだった。あの日、三春姉ちゃんが泣いているのを僕が慰めたときに、三春姉ちゃんの身に起こった出来事を聞いたときに、泣き顔で、僕にそうするよう懇願したのだ。

どうやら三春姉ちゃんは、事件を聞いたことによって僕が自分を嫌うのではないかと心配になったらしい。僕はそんなことないよと言ったのに、なかなか信じてくれなかった。

それならばということ、三春姉ちゃんが心細い時に壁を叩いて合図する。それに僕が嫌いじゃないよという意味を込めて、合図を返すのだ。それがこのやり取りの持つ意味だった。

正直あの日以来三春姉ちゃんのこと、父さんのことも、母さんのことも良く分からなくなってしまっていた。

父さんに何度か説明を求めたけれども、「勉強しろ」の一点張りだったし、母さんにいたっては、その話を振ると何処かへ逃げていく。もちろん三春姉ちゃんには聞くことなんてできない。

大体……そんな事件なんてあったのだろうか。家族三人で何か企

んでいるのではないだろうか。そんな疑心暗鬼に満ちた気持ちで今までを過ごしてきた。

こんこん。

僕は、機械的に返事を返す。

こんこん。

……もしそのような事件が三春姉ちゃんの身に起こったとしたら、僕が今日会った三春姉ちゃんは一体誰なんだろう。全くの別人なのだろうか。そもそも三春姉ちゃんはどういうつもりで僕にこの話を打ち明けようと思ったのだろうか。傷ついてまでして僕に知らせる必要はあったのだろうか。

全てが謎だった。

考えれば考えるほど僕には全く関係の無い話のように思えた。

こんこん。

こんこん。

こんなことを何回も繰り返し考えて、とうとう居ても立ってもいられなくなった。

(その事件の記事を探そう。そうでなくても、)

こんこん。こんこん。

(三春姉ちゃんのアルバムを引っ張り出して、五年前と五年後の写真を見比べてみて、顔が似ているか似ていないか確認してみよう)

こんこん。こんこん。

僕は、取り合えずベッドから立ち上がり部屋のドアから廊下に出た。

結局父さんは、前聞いた似たようなことを繰り返して、僕を追い返した。アルバムの場所すら教えてくれなかった。母さんにも尋ねたが、それも逃げられてお終いだっただ。

とぼとぼ部屋に戻ると、気を取り直して、パソコンに電源を入れる。

ネットを使えば、事件の記事ぐらいは引っ張り出せるだろう。

父さんがあの時語っていた事件の詳細を思い出しながら、検索フ

オームに文字を打ち込んでいく。

県 霊園 二十歳 強姦……。

最後のキーワードを苦々しく思いながら打ち込み、検索をする。そして、丁度一番上に表示されたリンクをクリックしてみた。

だけど、リンクが切れていたみたいでお目当てのウェブページは開かなかった。

回転椅子を一回転して、目元を指で揉み解す。そうしていると、突然部屋のドアが音を立てる。

こんこん。

壁からじゃない、新たな「こんこん」を発見した。ドアから音がするのは初めてのことだった。僕はパソコンのモニターの電源を落とし、ドアまで行って、ノブを回そうとする。

その時に、ふと、本当に開けていいのだろうか。もし開けたらどうになるのではないだろうかという不安が頭を過る。

ねえ、けーちゃん。開けて。寂しいよう。

三春姉ちゃんのその一言が僕を心苦しくさせた。……どうしてもドアを開けなければならぬみたいだ。

灰色のドアの向こうの廊下には、パジャマ姿の三春姉ちゃんが、枕を抱きながら立っていた。後ろ髪をピンク色のヘアゴムでまとめ、右側に流している。いつもの三春姉ちゃんが寝るときの格好だ。胸が高鳴るのを感じる。それと同時に不安感がどんどん増していく。

「どうしたの？ 三春姉ちゃんってそんなに寂しがりやだったっけ？ 前は頼れるお姉ちゃんって感じだったのにな」

僕はドアノブから決して手を離さずに、三春姉ちゃんに何気ない返事をする。

三春姉ちゃんは、枕に顔を埋めながら、ほっぺたを膨らませた。

「……前と今は違うもん。それより、酷いよ」

三春姉ちゃんは右で一纏めにした後ろ髪のを適当につかみ指でいじる。

「え？ ごめん。僕何かしたっけ」

僕は喉を鳴らした。ごくり。ドアノブを握っている手はじんわりと汗を滲み出している。

「……こんこんって、すぐにへんじ」

僕は三春姉ちゃんの心が読めなくなっていた。いや、そもそも彼女の心をわずかでも読めたことがあっただろうか。彼女はいいんだ。なんなのだ。

「お姉ちゃん、けーちゃんに嫌われたら、生きていけないよう」

「……ははは。嫌いになんてなるはずないじゃない。三春姉ちゃんのこと大好きだよ。心から思っている」

「だって、お姉ちゃん傷物になっちゃったんだよ？ お嫁にいけない体に」

「そんなこと無いよ。嫌いになんかならない。ずっとそばにいる」

「じゃあ今すぐ抱きしめて……」

三春姉ちゃんが枕を落つことした。それと同時に彼女の手のあたりにキラリと光る何かが見えた。

ドアを思いつきり手前側に引つ張る。けたたましい音をたてて、灰色のドアは閉まった。

何かが見えたはずだ。キラリと光る……アレはなんだろう。僕をどうにかするつもりだったのだろうか。

目を剥きながら灰色のドアを凝視していると、ドア越しから彼女のすすり泣きが聞こえる。

「……どうして？ そばにいるって言ったじゃんか。寂しいよう。寂しいよう。」

僕はなんとか言い訳しようとした。だけれども思いつく言葉は一つもなかったし、あった所で出てこないということを確認していた。だって、口が乾きすぎていたから。

「けーちゃんは私のおとうとなんでしょ？」

しばらく同じ言葉を繰り返していたが、やがて静かになり……ま

た不吉な音が鳴る。

こんこん。こんこん。

僕は返事することができなかった。そして、そのこんこんが消えてしまつまでドアノブから手を離す訳にはいかなかった。

……僕は、三春姉ちゃんのおとうとなんだらう？

×××

新聞 12月29日

父親を絞殺、凶器の縄で首を吊つて少年K意識不明の重体

12月28日午後12時半ごろ、裂目町二条四丁目<sup>なげめ</sup>の住宅の一室で「夫が殺された。息子が殺した」と一〇番通報があつた。

警捜一課によると、被害者はこの住宅の家主である遠藤隆（48）であると判明。検死の結果直接的な死因は首を締められたことによる窒息死とのこと。

また、同時刻、同住宅の二階の一室で首を吊っていた被害者の子供で長男の少年K（17）を保護。首を吊つてから発見されるまでの時間が短かつたため一命は取り留めたが、意識不明の重体で病院に搬送された。

警察は、通報者で被害者の妻である遠藤美鈴（46）の証言や、少年Kが首を吊るのに使用した縄に被害者のと思しき唾液が付着していたことから、被害者を絞殺した凶器と同一のものであると断定、少年を最重要容疑者として捜査を進めている。

また事件当日、現場の近くに不審者が居なかつたか聞き込みを行なつたところ、大柄な男を見たという目撃情報入手。この大柄な男の捜査も並行して勧める模様だ。

事件の真相は掴めず

父親を絞殺した疑いがかけられ、自らも首を吊った少年Kの事件（以下、裂目町少年K事件）の捜査が早くも暗礁に乗り出している  
と警察は記者会見で発表した。

その理由は、発見者であり容疑者の妻の遠藤美鈴さんが錯乱しており正確な証言が得られないことが一つ、また容疑者である少年Kの意識が戻らないためだ。

この事件の記者会見で警察は「少年Kの意識が戻り次第逮捕勾留し、事件の全容解明に努める」と発言した。この発言（逮捕勾留に少年法の強化を呼びかけている弁護団体は、発言撤回を要求、証拠物件の不備と主張。会見現場は終始大荒れの様相で締めくくられた）。

一方、不審に思われた大柄な男の情報も十分に集まらないため、警察は少年Kを第一の容疑者とみて捜査を進める方針だ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8968z/>

---

壁伝いISOS

2011年12月28日03時45分発行